



農村の高齢化と地域福祉を支える力 ——農村介護事業所の展開にみる——

宮田 喜代志

平成12年4月、介護保険制度がスタートした。社会福祉基礎構造改革の先端を拓くものとして登場したこの制度は、これまで医療制度や福祉制度などに分散していた「介護」サービスを独立した制度にまとめ、社会保険方式を取り入れたものとなっている。これは、給付と自己負担を明確にし「無駄遣い」を抑制するのが目的であるという。また、行政が福祉施策として行う「措置」から「契約」関係によるサービス利用に移行することで、介護の世界に市場原理による「競争」を導入することが目論まれた。サービスの質の向上を促すとともに「自由な選択」が出来るようにするためであるという。

ところが、農村地域とりわけ過疎の進んだ中山間地域では、私の見たところでは「自由な選択」を保証するはずの市場原理はほとんど機能しないといってよい。むしろ、社会資源が不足しているという制約条件の下、介護保険導入によって農村福祉はいっそう課題を突きつけられたといえるのではないか。

私は、研究所が行った農村介護事業所の実態調査に参加する機会を得た。この調査で、阿蘇山と九州脊梁に挟まれた地域の数カ町村について、40ほどの介護事業所を訪問調査に入った。介護事業所の運営状況について調査項目を聞き取りしながら、介護事業所のスタッフがどのようにして厳しい過疎地の状況を

切り抜けているのだろうか、地理的な制約や社会資源の不足にどう対処しているのだろうかといった疑問が沸々と湧いてきた。

はたして、聞き取りを重ねるうちにこの山間の農村においては、各事業所やそのスタッフたちにとっては、「競争」どころか「切磋琢磨」というに相応しい志向性が明らかとなってきた。つまり、介護保険が謳う市場原理による自由な選択など、そもそも介護サービスへの供給が不足している状況の中では成り立たない。そればかりかこのハンディを乗り切るには、競争ではなく「棲み分け」あるいは「シェアリング（共有）」という発想を取り入れなければならない事情が見えてきたのである。

もともと人口の少ない地域であるためにいわゆる「顔の見える介護」がある意味では余儀なくされる。現場の介護スタッフたちも互いに顔見知りである。そして、農村地域にはまだ「ともづれ」「結い」などの農村共同体特有の意識が生き残っている。こうした状況の中では利用者のためのという「公益性」が強調され、事業所経営としても実務的な協力・連携を重視する傾向がある。これが、事業所間のネットワーキングを推し進める力となっている。

概していえば、中山間地域では医療・保健・福祉の社会資源の不足に起因する「連携」せざるを得ない事情がある。それが市場原理を押さえ込む原理となり、「上手にシェアリングしたほうが得策」というモーメントが働く。その結果、一見「競争」的ではない地域的な連携の体制、すなわち「介護ネットワーク」形成が進められているといえるのではないか。

現在私は、「介護ネットワーク」形成についていくつかの類型があることを確認し、その類型の差異が、どうも社会資源の確保の問題に左右されるのではないかと考えている。ここでは都市的な「囲い込み」という行動パターンは表面的には影を潜めざるをえない。こ

うした地域的な制約が、「競争」へのモーメントと「公益性」のモーメントのどちらに傾くのか、これらが互いに拮抗しながらどのように類型差につながっていくのか、さらに分析を深めたいと考えている。

介護ネットワークの形成を探ることは、最終的には「地域ケアシステム」をどう構築していくかという枠組みの中でとらえなければならない。この地域ケアシステムをめぐることは、自助努力的な政策基調があり、介護保険はその代表であるといえる。しかし、その一方で地域ニーズの多様化に応じた住民密着を強める、「地域福祉運動」ともいべき流れがあることも見逃してはならないであろう。中山間地においては、後者の住民参加型福祉のほうが有利であると思うからである。

中山間地の厳しい条件は、介護ネットワークの形成を余儀なくする。しかし、その過程では実務者の連携が実績として蓄えられていく。介護事業所と利用者間でコミュニケーションがくり返されていく。それを土台として、地域住民は介護サービスを実際に利用し経験を深めることで、制度利用の長短を見抜く力を身につけることになる。それが道しるべとなり、自らが地域の政策づくりに参加していくための行程となるであろう。

近年のこうした動きを捉えて「民主的効率性」と評価する論者もいる。いかに総合的な地域ケアシステムを構築するのかにあたっては、現時点ではその端緒であるにしても、中山間地域での介護ネットワークの形成が果たす役割は大きい。

調査で訪れたS町やS村では、厳しい社会資源の条件を必死に切り抜けようとする姿が印象的であった。字単位での健康・介護予防活動への取り組み、医療サービスの不足を介護保険の徹底利用でカバーするなど地域をあげて取り組んでいる。それは、過疎のいっそうの深化を物語るものであるという現実的な見方もできようが、私は緑深い山々を眺めな

がらこうした「公益性」のパスを新しい農村福祉のシステム構築に生かせないだろうか、との思いをいっそう強くした。

ますます増えるであろう高・高齢化率の農村。米自由化をはじめWTO体制下の農業情勢。経済基盤が地域ごと揺さぶられているばかりでなく、農業者年金制度の後退などで老後生活の不安材料は増すばかりである。こうした中山間地の農村地域に、限界地だからこそその介護や福祉の新しい方向性を見つけ出せないかと思っている。

(熊本県熊本市・リハビリ介護研究所)

『わがママ倶楽部』奮闘中!!

及川 久仁江

はじめまして！

私は、岩手県南部の内陸部に広がる胆沢平野にある、【水と緑と散居のまち】^{いさわちやう}胆沢町に住んでいます。私自身、“うん十年”この胆沢町から一步も出ることなく過ごしてきましたが、現在は夫（サラリーマン1人）、子ども（中学生と小学生の男の子2人、小学生の女の子2人）、そして私の父母、の計8人家族でにぎやかな毎日を過ごしています。我が家は、米と花卉（切り花）を栽培している、いわゆる第Ⅱ種兼業農家ですが、米価なども年々下がってきており、農業だけで生活するのは難しくなってきたなあと感じているところです。（というわけでもないのですが、我が家では、馬屋を改築し、農家体験宿泊ができるようにしました。興味のある方は、ぜひ一度遊びに来てください。）

自己紹介や宣伝(?)はこのくらいにして、今回は、私たち子育て中のお母さんたちで作った自主グループ『わがママ倶楽部』の活動などを紹介したいと思います。